

# まんだら通信

第163号 (通巻195号)

平成22年 (2010) 01月 佛誕2576年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## 年の初めに

お飾りも取れて、お正月気分も薄れてきました。

穏やかなお天気で明けた三ヶ日は、少し風邪気味だったお陰で、久しぶりの寝正月になりましたが、皆様は如何でしたでしょうか。ともあれ、拙い『まんだら通信』ですが、今年も宜しくお願い申し上げます。ところで日本は、このところ少し・・・、いや大いに病んでいるように思えてなりません。

新年早々暗い話で申し訳ないとは思いますが、年の初めだからこそ確かめておきたいことですので、我慢してお聞き願いたいのです。

自分の思い通りにならないといって、子供が親を殺す。泣きやまない我が子を、折檻の果てに床に叩きつけて死なせる。

やがては子孫が莫大なツケを払うことを分かっていながら「子供手当て」、「アクアラインの割引」、などのおいしいことを言う政党に政権を任せる。



## 年末年始の『派遣村』

運悪く職を失い、この寒空に寝るところも食事もない人が、心置きなく勤め口を探せるようにと役所が作ったのです。

ところが実際は、村の中の窓口で職探しをした人は、たったの一割だったとか。

つまり殆どの人は職探しの気持ちなどなくて、ただで寝泊まりしただけということとです。この費用の元は税金です。

「待遇はどうでしたか」と聞かれて、「まあまあでした」とカメラの前で返事する始末。短い日にちとはいえ他人様のお情けで暮らしているながら、なんとという返事ですか。

共通していることは、「今さえよければ、あとは何とかなるだろう」とか、自分の責任は棚に上げて、何とかしてくれという、本来の日本人なら一番忌み嫌う、『恥』を忘れた甘えです。

日本には、国が滅びるかも知れないという国難が三回ありました。蒙古襲来と黒船来航、そして大東亜戦争

れらは何れも外からの力でした。

あれから六〇年あまり。

中国やアメリカなどに比べて国の大きさ、地下資源、人口と、何れも小指の先ほどしかありません。

不況で困っているといいながら、日本はいまだに『経済大国』の地位を失っていません。年末年始の高速道路の渋滞は相変わらず。「お金がなくなつたので、今月から一日二食にしました」という話も聞きませんね。

それなのに「日本はこのままでは無くなつてしまふ」と国の行く末を心配する人が、特に最近多くなつていきます。

すべきことをした上で、他人さまと折り合いをつけて生きることが、いつの時代でも大切なのですが、人権やら個性やら平等ばかり主張するので、かえつてぎくしゃくするのではないのでしょうか。

では、どうすれば、日本人がもともと持っていた他人への優しい心を取り戻せるか。その一つは『江戸時代に学ぼう』ということとです。

「江戸時代の殆どの人は、思っていることも言えず、食うや食わずで縮こまっていた」というのは真つ赤なうそで、本当は日本中が今以上に自由で輝いていた時代でした。

浮世絵は歌舞伎と並ぶ庶民の芸術ですが、その勝れた技法や目の付け所がヨーロッパの画壇をビックリさせ、ジャポニスムの草分けになりましたね。印象派で有名な画家たち、例えばモネ、ルノワール、ゴッホ、ゴーギャンその他は、みんな浮世絵の影響を受けているそうです。

治安の良さも世界一でした。江戸の人口は世界一の百万人以上でしたが、正規の警察官に当たる『八丁堀の旦那』つまり『町方同心』は北と南の奉行所を合わせて、たったの十二人だったそうです。町方同心は、それぞれ自分の給料から五人程度の、捕物帳でいえば銭形平次にあたる『目明かし』を抱え、目明かしは何人かの『下つ引き』を抱えていたそうですが、一月置き勤務ですから、百五十人足らずの警察官で間に合つたということですね。

治安の良さについては、以前NHK放送の『コメディーお江戸でござる』で、杉浦日向子さんも、「江戸の長屋には鍵なんてなかった」といつていましたね。

江戸っ子の生まれ損ない銭を貯め

という川柳から分かるように、「宵越しの銭」を持たなくても、ちゃんと暮らせたということとです。

社会が安定して暮らしたゆとりがなければ、芝居見物や浮世絵を買って楽しむこと、物見遊山など出来ません。

でも、「田舎は悲惨だった」という人もいます。

以前、大掃除の時に『月並み句会』のメモが沢山出てきました。俳号ですから、今となつてはどこのどなたか分かりませんが、数の多さから見ると特別裕福な人ばかりではないということは言えます。

水源地、白浜ダム付近に、数年前まで使っていた堰があります。完成記念の石碑に、工事をしたお百姓さんの名前と俳句が彫ってあります。

昔の人の方がゆとりがあつたんだなあ」と感銘を受けたことがあります。

この世は『相身互い』です。自分にではなく、自分以外の人や物に優しい心を向けられるよう、今年も気をつけたいと思います。

相変わらず、凄惨な事件が続きますね。

これだけ殺人事件が多いということは、やはり、日本人の心がかかなりずさんでいる証拠なんじゃないでしょうか。たしかに不景気ですし、格差も次第に広がっています。ただ、同じ貧乏でも、私が子供の頃に比べて、なんだか心まで貧しくなっていましたような気がいたしますが。

ええ、私の家も貧しかったですからねえ。借家の四畳半で、子供の頃、私は弟と同じ一枚の布団で互い違いになつて、寝ていましたからね。それでも、なんだか平気だった気がします。

先日、何気なくケーブルテレビを見ていたら、『警察日記』という昔の映画をやっていました。ご存知の方、いらつしやいますか？ 昭和三十年頃の映画で、もちろんモノクロでございました。

最初は「なんだ、ずいぶん古い映画をやっているな」と思っただけなんですけど、これがなかなかいい映画だったのです。今日は、その話をしましょう。

会津磐梯山の麓の田舎町の警察署。

田舎といえども、毎日、いろいろな事件が起こって、警察署はかなり忙しい。

そんなある日、森繁久弥扮する吉井巡査が、まだ幼い少女ユキコと赤ん坊の姉弟の捨て子を発見するんです。が、いくら探しても親は見つからない。しかたなく、街一番のお金持ちの料亭の女将に赤ちゃんを預け、幼いお姉ちゃんを自分の家で預かります。

吉井巡査の家も子でくさんで、たまたま赤ちゃんか生まれたばかり。

それでも、「子供一人増えたつてたいして変わりはないわよ。かわいそうだから預かってあげましょ」と巡査の奥さんがいいます。

その翌日、今度は万引き犯が警察に連れてこられるんです。若いお母さんで、背中に赤ちゃんを背負って、小学一年生の子供を連れて。もう見るからに貧しそうなお母さんなんです。

「何を盗んだんだ」と聞くと「すみませんでした」と泣きながら、小さな子供用の長靴を差し出すんです。これから会津は厳しい雪の季節になる。それなのに、子供に長靴を買ってあげられない。つい、万引きをしてみましたというわけです。雪道をぼろのズックじゃかわいそうですからねえ。

事情を知った巡査は、長靴を取り上げると、被害者のマーケットの主人に言うんですね。「おい、商品が戻ったからいいだろう」つて。商店主も「へえ」とかいつて、出てゆくんです。

「いいかい、お母さん。どんなに貧乏でも他人様のものを盗んじやいけないよ」と説諭して、その日は帰らせるんです。

それから数日後、今度は男の置き引きが捕まる。これは留置場に入れられて、本格的な取り調べが始まるんですが、その翌日、無銭飲食で親子が警察に突き出されてくるんです。

「なに、無銭飲食？」といいながら、巡査が取り調べに入ろうとして、犯人を見ると、以前、万引きで捕まった親子なんです。

「なんだ、おまえたちが。ダメじゃないか」

巡査が大きな声を出すので、小学生がお母さんの体の陰に隠れようとします。巡査は少し反省して、「僕、何を食べたんだい」とやさしく聞くんですね。

「ふーん、おいしかったか。食べたのは、それだけか」

「ラムネ……」

「そうか、ラムネも飲んだか。お母さんは何を食べた」

そう聞くと、子供が小さな声で答えるんです。「母ちゃんは、何も食べていない」聞けば、満州からの引揚者の一家で、夫は一週間前に仕事を探してくると言つて

帰って来ない。お金は一銭もない。「母ちゃん、おなかがすいたよ」と泣く子供を見るにしのびなくて、自分は食べたくとも子供にはおなかいっぱい食べさせたいと、悪いとは知りながら無銭飲食を働いたと告白するんですね。今度は二度目ですから、巡査も名前を聞きます。

「お父ちゃんの名前は？」

すると、いま、留置場に入っている男なんです。

「お父ちゃんは、いま、牢屋にいる」と言つて、家族が涙の再会です。

巡査は署長に相談して、反省をしているということ、男を留置場から出してあげ、「いいか、生きていくことはつらいだろうけど、決して家族は離れてはいけませんよ」とやさしくお説教をしながら、自分の財布からなげなしの小遣いを出して、言うんです。

これで、まず、みんなでいっしょに食事をしなさい。それでおなかがいっしょになつてから、これからのことを考えなさい。いいか、決して離れちゃダメだよ」

一家は、頭を深々と下げて、警察署を出ていきます。

そんなある晩、巡査の家で預かった少女が行方不明になつてしまふ。真つ暗な寒い夜道を少女は、弟が預けられた料亭を探してトボトボと歩いていくんですね。目に涙をいっぺいたため。そして、探し当てた料亭の入口にたずんでみると、それを女将が見つけて、「ああ、こんなに小さくても、弟が心配なんだねえ。いい子だよ。いいよ、今日からうちでいっしょに暮らそうね」と言つているところに巡査がやってきて……。

と、まあ、そんな映画だったんですが、映画だとわかっているんですが、なんだか胸が熱くなりましてね。

いま、こんな警察署もないし、巡査も町の人たちもないでしょうね。心がカサカサに乾いた時には、古い映画を見て、自分たちの子供時代を思い出しながら、心に潤いを与えてあげませんか？

月刊誌MOKUの一月号、三遊亭鳳豊さんのエッセーです。MOKU出版さんとご本人のご好意で転載させて頂いております。



くれぐれも気をつけましょう。  
◆除夜の鐘から初護摩と、今年も厳かにつつがなく終わることが出来ました。特に、お礼のご祈祷を申し込んだ皆様、今年も平安無事をずっとお祈りしています。  
◆佐倉市の大森さん。去年はティッシュ入れでしたが「除夜の鐘を撞きに来た皆さんに」と、今年絵柄のきれいな着物地で巾着を送って下さいました。  
女性の方には特に人気です。大森さん、いつも有り難うございます。  
◆気温8度という寒い日でも、自生のアブラナに、うちのニホンミツバチが訪れています。

20010/01/09 龍渉

◆写真の津波慰霊大仏。本願寺維持財団の援助資金で作られたそうで、発案者は『あそか基金』を管理して下さっているアンギラサさんと、ご本人に聞きました。アルカイダに破壊されたアフガニスタン、パーミヤンの仏像を模したとのこと。手すりには我々に見覚えの日本の擬宝珠が。  
◆寒の入りを待っていたかのように、寒さが厳しくなりました。ヨーロッパ・アメリカでは記録的な寒波が居座っているとか。後2ヶ月、体には

余滴